広津和郎全集　第三巻
定価四二〇〇円
昭和四十九年十月一日印刷
昭和四十九年十月十日発行
著者　広津和郎
発行者　高梨茂
印刷者　山元正宜
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

# 広津和郎全集　第三巻

# 目次

若い人達　九
ひさとその女友達　六六
あの時代　一〇三
直木三十五の笑い　一四九
傷痕　一七三
少年とブローチ　一八六
途中下車　一九九
秋　二一〇
兄　二二六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

兄弟　二四
鶴巻町　二七
眼をそらさぬ娘　二八
夾竹桃　二九
海の色　三一
総長の温情　三三
堤防と少年　三六
あさみどり　三六
腕の噛みあと　三七
春の落葉　三八
戯曲
八月の夜　四九

生きて行く　四三四
妻　四六八
男装の女　四八〇
童話
太助の薄馬鹿　五〇三
王様になった狐　五〇七
蜘蛛と蚰蜒　五一三
三吉の鳶口　五一〇
鼻　五一七
あとがき

# 小説　三

# 若い人達

## 一

堀川順三が借りた部屋は木挽町の裏通、というよりも路地のように細い或横丁の駄菓子屋の二階の四畳半であった。十二円というのを十一円に負けて貰った。水野にいわせるとそれは法外の安さだということであったが、昭和九年当時の相場としても確かに安かったに違いない。

駄菓子店の右手に小さな戸口があり、階下とは別にそこから直かに二階に上れるようになっていたが、下の駄菓子屋の店つきの小ささとは不似合に二階には部屋が三つもあった。東京には部屋貸しをして家計を補っている人達が多いが、ここもそうした目的の人達のために建てられた貸家の一つで、借主が家主に払う家賃の大部分は二階の部屋の又貸しから上ろうという計算なのである。

「小母さん、越して来ましたよ」と店先で声をかけても、「はあ、どうぞ」と奥から少し皺嗄れた老婆の声が答えただけで、別段誰も立って来て顔を見せようとはしないような暢気さであった。

ぎしぎしと軋む梯子を上ると真中に三尺幅の細い廊下が通り、その廊下の右側にはこの家として少し上等の八畳があり、左側にはそれより粗末な四畳半が二室並んでいた。順三が借りたのはその奥の方の四畳半であった。

引っ越しに手伝ってくれた水野と二人で順三がその廊下を通って行くと、右側の八畳からも左側の四畳半からも女の顔が窺いた。

「今日は。この男が今度こちらに御厄介になる事になったのです。よろしくお願いします」と水野は隙かさずキサクな調子で女達に挨拶したが、そんな風に軽く出られない質の順三は、水野の蔭に隠れてちょいと不器用に頭を下げただけであった。

「こちらこそどうぞよろしく」

四畳半の女は愛想よく応じたが、八畳の方の女は笑顔一つ見せず直ぐぴしゃりと障子を閉めてしまった。障子の閉まる前に見えたところによると、内には総桐の箪笥や三面鏡台が明るく飾ってあり、何かその女の不愛想さは上等の部屋に住



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んでいるという階級的気位を四畳半党に向って示してでもいるように見えた。

「おい、女附きだぜ。こいつは面白えや」と部屋に這入るなり水野は小声で囁いて順三の肩を軽く叩いた。それから窓を開けて見て、「東向きだな。こりゃ豪勢なもんだぜ。俺のアパートの西向きと違って朝陽は当るし、此処なら夏は涼しく冬は温かそうだよ。うまい部屋を見つけやがったなあ」

それが如何にもこの部屋の見つかった事を心から喜んで呉れている様子なので、順三はこの友達から逃げ出した自分が内心恥しかった。

故郷の助川で家が近くで顔見知りであり、小学校時代も同じ学校の自分より二級上だったという縁故から、順三は不案内の東京に出て来ると水野の歌舞伎座裏のアパートに荷物を下ろし、そこに当分同居させて貰おうと思ったのであるが、それがそもそもの間違いだったのである。水野は何処から手に入れて来るのか流行の洋服を著、スマートな恰好をし、始終銀座通をぶらぶらしているだけで、仕事らしい仕事は何もしていなかった。従って無収入であった。

順三はその頃は既に下火になりかかっていたが、それでもまだその余燼の消えなかった階級運動に関心を持ち、少々シンパ的役割を演じたという廉で助川の発電所の電気技手の職を逐われたのである。水戸の甲種工業を出た彼はその時発電所の主任の次の次の地位まで昇っていたが、その事件で発電所を逐われた上にブラック・リストに載ったらしく、上京してから幾ら電気技手としての仕事を探しても何処でも相手にしてくれなかった。退職手当として貰った三百円の中百円を母に残し、残りの金を胴巻に入れて上京したのであるが、金の事は決して水野に話しはしなかったのに、水野は鼻で嗅ぎ出すのかいつの間にか彼のふところを見抜いていて、アパートの部屋代を立替えさせたのを手始めに、散髪代、ビール代、飯代と始終順三にせびり、僅かの間に順三のその臍繰りを残り勘いものにさせてしまった。順三は自分で使った金よりも水野に使われた金の方が余程多かった。

そこで今水野から逃げ出さなければやがては自分で他に部屋を借りる事さえ出来なくなり、水野同様銀座の食詰め者になるより仕方がなくなると思ったので、思い切って今度の部屋を借りる事にしたわけなのである。銀座通を朗かにぶらぶらしながら暢気な顔をして毎日々々を行き当りばったりに生きて行く水野の度胸もなければ才覚もない順三には、そのまま行詰って行くという事は思って見るだけでも恐ろしい事であった。

併し他に部屋を借りたという事を知ったら、相当銀座のヨタモノ気分になっている水野がさぞ腹を立てるだろうと予想したのに、案外水野はあっさりしていた。

「そいつは無理もねえとも。俺と一緒にいたら君は一文なしになってしまうよ。よし、俺も引っ越しに手伝ってやろう」

そういって水野は機嫌よく笑いながら、順三の先に立って器用に荷造りなどして呉れた。順三は水野のそのこだわりのないあっさりした態度に、何か自分の心の方が却って後暗い気がした。今もこうしてこの部屋の好さを心から喜んで呉れている彼の様子を見ると、この男から一途に逃げ出そうとしている自分の方が、この男よりも人が悪いのではないかというような気恥しさを感じて来るのであった。

## 二

併し兎に角自分の部屋を持てたという事は嬉しいことであった。順三は久しぶりで母に手紙を書き、夜遅くまで興奮して起きていた。

「東京は不景気なのでまだ仕事は見つかりませんが、併し近い中には見つかると思います。私は元気で丈夫に暮しておりますから御安心下さい。一年御辛抱して下さればきっと母上様を東京にお迎えします。どうぞ母上様にもくれぐれも御身御大切に願います。今度表記に部屋を借りました」

彼が封筒の表に「平信」と書いた通り、彼と母と以外の第三者には頗る平凡な手紙と思われるに違いないが、併しそれを書いている彼の眼前には助川の町はずれの古い家にたった一人で暮している母の面影がなつかしく浮んでいるのであった。

大正の初め日立鉱山が盛んだった頃そこの技師長をしていた順三の父は、その助川の町はずれに小さな家と土地とを買ったのであるが、それから間もなく彼は顔に黒い布をかぶされて会社からはこばれて来た。酒が強く赭ら顔にでっぷり肥えていた父は、執務中に突然心臓麻痺を起したのである。

順三が水戸の甲種工業に通う頃まではどうやら金がつづいたが、そこを卒業するのがやっとで、家も土地も既に銀行に抵当に這入っていた。母親は裏に畑など作ってほそぼそと暮しているので、順三が東京に出て来た時置いて来た金でここ四五ヶ月はどうやら過して行けるであろうと思うが、併し半年の中にはどうしても順三から仕送りをしなければならないのである。

故郷で「赤」で馘首になってから暫くは、一度ああいう思想にふん掴まると多くの青年がそうなるように、物の考え方がその方向以外になかなか出られなかった。つまり眼の前に立ちふさがっている階級の障壁を突破するのでなければ、あらゆる幸福も希望もあり得べきものではない、たといあった

ところでそんなものは個人的逃避以外の何ものでもない、といったような観念から離れる事が出来ず、それ以外に考える余地が絶対にあり得ないように思われていた。それだから彼がシンパ的関係を持っていた或大きな組合の壊滅を眼の前に見た時には、全くこの世が「お先真暗になった」と思わないわけに行かなかった。

けれどもどうやらその暗い気持が近頃は少しずつ消えかけて来た。兎に角働かなければならない。そして母を安心させなければならない。この事の重要さは観念の重要さよりももっと重要な現実当面の身についた問題であるという事が、少しずつ解りかけて来たのである。

「よし、何をしてでも働くぞ」と彼は腕をさすりながら心に叫んだ。手頸のところはくびれたように細いけれども腕には筋肉の峰が盛上っている。こんな健康な身体を持っていながら、何かに働けないなどという事がある筈はないではないか。

彼はやっとこの部屋に自分一人になれたという事が、淋しくはあったが嬉しかった。耳をすますと都会の騒音が一つの持続した大きな響きとなって聞えて来る。その騒音の中に何かの希望が隠れているような気がする。

十二時半頃誰か梯子を上って来る音が聞え、隣りの四畳半の障子が開いた。四畳半の女が何処からか帰って来た事と思っていると、パタパタと廊下にスリッパの音がし、

「お隣りの方、まだお目覚め？」という声が順三の障子の前でした。

「はあ、僕ですか」

「ええ、お目覚めでしたの。ちょいと失礼」そういって彼の障子を細めに開け、「サンドウィッチ如何」

畳の上にサンドウィッチの包を置くと直ぐ障子を閉め、「おやすみなさい」といったかと思うと、逃げるように隣りの部屋に戻って行ってしまった。

「あの……」吃驚した順三はその後を追うようにして障子を開けたが、隣りの障子は既に閉っていた。それで仕方がなしに、

「どうもありがとう」と彼は声をかけた。

「いえ、どう致しまして。では又明日」

順三は暫く呆然としていたが、併し始めて引っ越して来た晩のこうした隣人——而も女の深切は彼の心を柔かく包まずに置かなかった。

翌朝はまたその女は障子の前に来て、

「まだ新聞お取りじゃないでしょう。あきましたから」といって彼の障子の間から都新聞を投げ込んで行った。併しそれ以上彼の部屋に這入って来て話し込んで行こうなどとするのではなかった。

前の八畳の女——昨日水野が挨拶をしても返事をしないで

びしゃりと障子を閉めてしまったあの女のところには、昨夜男の客の話声がしたが、その男と一緒に何処かへ出掛けて行ったまま今朝になってもまだ帰って来ないらしく、そのひっそりした障子の前にはスリッパが見えなかった。

炊事場は三室共通であった。順三が薬罐を瓦斯にかけていると、そこに隣りの四畳半の女が土鍋に米を入れたのを提げて現れたので、彼は改めて昨夜のサンドウィッチや今朝の新聞の礼を云った。彼女はあっさりと、

「いえ、どう致しまして。男の方お一人じゃ大変でしょう。御飯は外で召上りますの」

「ええ。行き当りばったりやっています」

「不経済だわねえ」

昨夜サンドウィッチを呉れた時障子の隙間からちらりと見たところでは、いかにもカッフェエの女らしい派手な著物を著ていたのでもっと若い女のように想像したが、今勝手口でこうして水仕事をしているところを見ると、もう三十を廻った何か色の褪せたような地味な女であった。恐らく世帯崩しが最近女給になったばかりなのであろう。順三は何もこの女に空想を抱いたわけではなかったが、昼間の光で見た彼女の平凡さに幾分幻滅に似たものを感じた。

「此処は表の戸が開(あ)けっ放しでしょう。だから何だか物騒な気がして仕方がありませんでしたの。前の瀬尾さんとわたしっきりで女ばかりだものですからね。でも、これからはお宅が越して来て下すったんで安心ですわ」

「前の方(かた)……瀬尾さんというんですか、瀬尾さんも何処かで働いているんですか」

順三が話の継ぎ穂がないのでそんな事を訊いて見ると、彼女は鼻の頭にかすかに冷笑を浮べた。

「どうなんですかね。何をしているのか解りませんの。何でも御自分じゃ何処か女学校、そうそう、お茶の水とか何とか大層立派な女学校を卒業したっていっていますがね。蒲田にも暫く這入っていた事があるんですって」

「ほう、女優だったんですか」

「御自分じゃそういっていますがね。でも、せいぜいワンサだったんだろうなんていう人もあるんですよ。……でもわたしにはよく解りませんわ。気位が高くって、わたし達風情にはなかなか挨拶もなさらない方なんですもの」

して見ると水野や自分にばかりでなく、あの八畳の女は前からの同宿人である彼女にも挨拶をしないと見える。

「こうして縁あって同じ屋根の下に暮しているんですもの、ねえ、あなた、お互に愉快な笑顔をし合うのが当り前じゃありませんか、ねえ、あなた」

この女——五十嵐よね子という名である事を自分で名乗った——はその八畳の瀬尾さんに対する反感を恐らく長い間溜

めていたのであろう、その捌け口が見つかったというように、順三を掴まえて薄い唇を動かしながら流れるような舌でまくし立て始めた。

「相当なもんですわよ。だって始終来る男だって五人や六人じゃきかないんですもの。ふん、何をしているんですか」

善良そうではあるが教養のないはしたなさがその言葉の端々に露骨に現れていた。この新しく越して来た借部屋の周囲に対する好奇心に駆られていた順三も、初対面のこの女の饒舌には聊か閉口させられた。

併し五日六日と経って行く中に、なるほど五十嵐よね子のいう通り、八畳をたずねて来る男が五人や六人でない事が順三にも解って来た。男達がその部屋に泊って行く事も毎晩の事であったし、又男達の泊らない晩には彼女自身が何処かに泊りに行くと見えて、廊下にスリッパが見えず、部屋は真暗に森閑としていた。

けれども、そういう五十嵐よね子自身のところにも二人の男が絶えず訪ねて来た。一人の五十位のでっぷり肥った町家の旦那といった男は昼間彼女の出勤前に来た。そして三十五六の職人か何かであるらしい眼の鋭い男は三日に一遍、五日に一遍ぐらい夜泊りに来た。その夜泊りに来る男は前に彼女と世帯を持っていた事があるらしい男のようであった。壁一重の順三はそこから洩れて来る私語によってそれ等の事を想像する事が出来た。

彼女は肥った町家の旦那風の男の事は「旦那、旦那」と呼んでいた。そして夜泊りに来る男の事は「留さん」と呼んでいた。

この五十嵐よね子から較べると、八畳の瀬尾女史は器量がずっと上で、なるほど、お茶の水出ででもあるかというようなインテリ好みの顔をしていた。総のついた紐を前にだらりと垂らした桃色のパジャマを始終著ていて、細面の頬の両側にパーマネントをもしゃもしゃさせ、どっちかというと黒目勝の美しい眼なのににこりとも愛嬌の影を見せず、眉を少しひそめ加減に、細巻の煙草を片手に持って廊下を空嘯いて歩くところは、職人のおかみさんの世帯崩れの五十嵐よね子とコマの合う筈がない事が当然であった。

併し最初ばかりでなく何日経っても彼女は顔を合わせても決して順三に会釈しなかった。

「凄えぞ、あいつは」と水野は順三のところに訪ねて来る度に、順三には恐ろしくて到底近づけないこの瀬尾女史にだんだん興味を覚えて来るらしかった。「ああいう高慢ちきなのが逆になると凄え情熱を発揮するんだぜ。あれなら俺は城を傾けても後悔しねえな」おどけたようにこんな事をいって眼を輝かしていた。

## 三

そんなような同宿人のいる駄菓子屋の二階の四畳半の一室から、順三は生活の出発を始める事になったのである。

七月に上京してからもう三ヶ月であった。電気技手の口が絶対にない事が解ったので、どんな事でも振出しから始めようという決心をしているのであるが、それでも仕事というものは殆んどなかった。彼は職業紹介所の前に行列している人々の間にも立って見た。「秋口になったらちっとは景気が出るかと思ったのに相変らずの不景気だ。この分じゃ今年ゃ暮の寒さが思いやられるぜ」と行列の中で同じく順番を待っている屈強な若者が絶望的に呟いているのを聞き、順三は暗い気持になって帰って来たが、併し暑くなく寒くない初秋の気候は肌に快く、四畳半の部屋に仰向けになって雑然とした都会の騒音を聞いていると、何もそう悲観する事はない、いつか自分にもこの大都会で何かやれそうな気がして来るのであった。

或夕方、その日も彼は職業探しに一日ほっつき歩いて来て、四畳半に帰って来て畳の上に疲れた身体を横たえていると、そこに水野が勢込んで這入って来た。

「おい、ニュースがあるぞ、ニュースが」と彼は声をひそめて廊下を隔てた八畳の方を指さした。「正体が解ったぞ！」

「正体、何の？」

「何のって、あれよ、お向いの女史よ」

二人はいつか八畳の女を「女史」とか「瀬尾女史」とか呼ぶようになっていた。

「ほう、どう解ったんだい」と水野程の関心を持たない順三は疲れてもいるので、勢込んでいる水野の顔を冷淡に眺めた。

「正体が解って見ると一寸げっそりさせられる代物さ。おい、ありゃスガだよ」

「スガ？」

「そうよ、ストリート・ガールよ」

「えッ、あの人が？」

「驚いたろう」と報告したニュースの効果に得々として、「併しストリート・ガールと云っても大分高級なんだ。じゃらじゃらポケットを掻きまわして、五十銭銀貨を六枚や七枚やっと探し出すといったような階級は相手にしねえんだ。鰐革の財布をよ、こうやって内ぶところから出して」と手附をして見せて、「折目のつかない十円札を何枚もすっと抜き出して見せるようなブルジョワでなければ相手にしねえんだよ。凄えもんじゃないか。そう聞いて見ればそれだけの面構えはしているよ。相当のインテリ有閑と見て尊敬していたのに、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com